

『刺絡編』の鍼法

鶴田 泰平

日本鍼灸研究会

【緒言】『刺絡編』一卷一冊（明和8年〔1771〕刊）は、江戸中期から後期の医家・荻野元凱による、三輪東朔の口述、伊藤鹿里（大助）の筆記『刺絡聞見録』〔1817〕とともに日本近世における刺絡術の代表的著作である。また、江戸期における他の刺絡術の著作としては、垣本鍼源の『熙載録』〔1782〕や入江大元の『刺血絡正誤』などがある。荻野元凱〔1737-1806〕は金沢の人。名は元凱、字は子元、号を台州、また、左仲と通称した。越前の奥村良筑の門で吐方を学び、のち、京で医を開業した。古方派の医家であるが、腹診のみならず蘭方にも通じ、宮廷の典医、江戸幕府の医学館教授などを歴任し、温疫論も講義した。また、刺絡術の再興にも尽力し、『素問』系刺絡をオランダ流刺絡により補足して刺絡治療を確立しようとした。なお、元凱のオランダ流刺絡は、当時の通詞で蘭方医である吉雄耕牛と、同じく元通詞の家系で蘭方医である植林家に学んでいる。他の著書に『吐法編』〔1764〕などがある。

【目的】今回は、元凱の刺絡術及び医術や思想を推察することを目的に、『刺絡編』の記述内容を調査した。

【結果】本書の構成は、高道昂（号葛坡）による序、元凱の識語、本文、木村恒徳の跋からなる。本文の構成は、①本書執筆に至る動機とその経過、②「統論」、③「血絡」、④「論血」、⑤「達鬱」、⑥「鍼目」、⑦「刺法」、⑧「刺変」、⑨「刺禁」、⑩「刺手背法」、⑪「刺臑中法」、⑫「刺少商法」、⑬「刺額上法」、⑭「刺鼻中法」、⑮「刺外腎法」、⑯「抓鍼法」、⑰「蜚鍼法」、⑱「角法」、⑲「効案」の19項目であり、その概要は以下のとおりである。①「伝統的刺絡術を学び、のち、吉雄、植林の二氏に接見し、オランダ人の瀉血療法を見るに、精緻明解にして、実践的なものとする目的から『刺絡編』を著した。」と著述の動機を述べる。②人体での「血」「血絡」の様態と刺絡術の有用性を述べる。③西洋医学書『シカーウテカムルブック』に記載の13の血管の位置と走行、名称を述べる。④血絡の走行に個人差があること、血絡の色や触感による、体格や体質、病證の弁別を述べる。⑤刺絡臨床における、『素問』『靈樞』の経絡、経穴、病證理論の重要性を説く。⑥刺絡術に使用する鍼（「鈹鍼」「三稜鍼」「三稜縫鍼」「葦葉鍼」）および瀉血道具（「ランセータ」「機鍼」スネーツブル）とその材質（鉄か銀か）の考察と、それらの図を付す。⑦刺絡術における、皮膚の切開時の心得と前準備について述べる。また、切開失敗時の対処法にも言及する。⑧刺絡術における患者の体質による適応と不適応、施術時の出血多量とショック状態等の過誤発生時の対処法と、予防法を詳述。⑨前項に続き、刺絡術不適応の患者の性状など13の禁忌例をあげたのち、刺絡術が行なわれ難い理由と、解決策としての『素問』『靈樞』の反復学習の必要性を説く。⑩から⑮にて、人体部位別の刺絡術の基本法とその主治病症を述べ、「○○血絡図」として各部位の標的血管の走行を、また、「刺後綿縛図」として施術後の止血帯手法を図示する。⑯から⑱にて、刺絡術以外の瀉血目的の特殊鍼法「抓鍼法」「蜚鍼法」「角法」を挙げる。⑲13例の臨床例について、患者の情報と症状、治療内容、瀉血量、予後を示す。

【考察】上記の結果より、元凱は刺絡術を臨床上高い効果をもつものと認めつつも、その施術には、正しい技術、万全の準備、患者ごとの適、不適の見極めが必要であり、それを誤ると、体調を傷むり、時に死に至らしめる可能性を有する、一種の劇法と捉えていたと思われ、刺絡術の正確な運用と、過誤を防ぐためにも、『素問』『靈樞』の学習が必要であると説いており、当時新進のオランダ医学の知識や技術、器具を取り入れつつも、施術全体の考察や適応の見極めには伝統的中国医学の理論を重要視していた元凱の姿勢が窺える。